

細見谷溪畔林と十方山林道

第二章 広島県廿日市市

AKIMASA.NET

<http://www.akimasa21.net/>

21世紀は環境の世紀

第1節 安芸国佐伯郡の変遷

広島県廿日市市

広島県廿日市市は、安芸国佐伯郡（広島県西部地域）の中心であった廿日市を核として、瀬戸内沿岸部で発展してきた市域である。廿日市という名前の初出としては、室町時代の享徳3年（1454年）ごろの資料が知られている。なお、廿日市の名前の由来は、毎月廿日の日に市が立ったことによるとされているものの、詳細については不明な点も多いようである。

廿日市は、毛利元就の奇襲（厳島合戦）でも有名な対岸の厳島（宮島）と深い関係があり、中世には、厳島神社の神主家の居城（桜尾城）があった所でもある。古くから木材加工業が発達しており、また、現在では「けん玉」の生産量日本一を誇っている。

廿日市は、昔の西国街道（江戸時代の山陽道）沿いであって、古くから栄えていたことは間違いない。1889年（明治22）の市制町村制施行当時、すでに佐伯郡廿日市町として、同郡内の厳島町（現在の廿日市市宮島町）と並んで町政をしいている（当時の佐伯郡2町39村）。

佐伯郡が成立した時期ははっきりしないが、かなり古くからあった郡のようである。「廿日市町史・通史編（上）」P.285によれば、「佐伯郡の郡名は藤原宮出土木簡に「安芸国佐伯郡雜腊二斗」としてはじめて見える」。その時期については、「木簡作成の上限は大宝元年（701）ということになる」（同上P.286）としている。

古代の佐伯郡の範囲は、同書P.285の記述にあるように、「東は広島を中心部を流れる太田川から、西は県境の小瀬川にいたる」かなり広いものであった。その佐伯郡は、中世の一時期、佐東郡と佐西郡に分かれていた。それが、1664年（寛文4年）佐西郡が佐伯郡と改称され、ここに佐伯郡の名前が復活した。なお、佐東郡の地はその後紆余曲折を経て、広島市の政令指定都市移行（1980年4月1日）に伴い広島市安佐南区となった。

1) 賀茂神社（山口県柳井市）の梵鐘の鑄工名として、「廿日市ひがしかり屋三郎次郎」と記した資料がある。

平成の大合併

安芸国佐伯郡は、1889年(明治22)の市制町村制施行以来幾多の変遷を経て¹⁾、平成の大合併によって最終的に消滅し、その長い歴史を閉じた。そして現在は、大竹市、廿日市市、広島市佐伯区、および広島市西区の一部、江田島市の一部となっている。

廿日市市は、旧・佐伯郡廿日市町からの市制移行(1988年、昭和63年4月1日)によって誕生し、広島市のベッドタウンとして発展している。細見谷のある旧・佐伯郡吉和村は、2003年(平成15年)3月1日に廿日市市と合併して廿日市市吉和となった。この合併によって、廿日市市は大規模林道問題の当事者となったのである。

その他、同じ佐伯郡内の佐伯町との合併(吉和村と同じく、2003年3月1日)、さらには大野町および宮島町との合併(ともに2005年11月3日)によって、廿日市市の市域は大いに広がった。

その結果、隣接する自治体は、北から時計回りに、広島県山県郡安芸太田町(北)、広島市(北東～東)、広島県江田島市(南東)、広島県大竹市(南～南西)、山口県岩国市(西)および島根県益田市(北西)となっている。

2005年(平成17年)10月1日現在

世帯数 42,918

総人口 115,530

男 54,606

女 60,924

面積 489.36(平方キロメートル)

(総務省統計局「国勢調査報告」より)

1) 参考資料：「広島県市町村の変遷」広島県地方課(昭和41年9月)

第2節 吉和地区を取り巻く道路環境

一般国道と高速道路が並行して走っている

広島県廿日市市吉和は、広島県北西部の山あい^{よしか}にあって、広島・山口・島根3県境に接している。広島県西部の県境は、広島・山口県境が瀬戸内から北上して中国山地で右に折れ、そこから北東に向けて、広島・島根県境が中国山地沿いに延びている。そして、吉和地区はその右手前になる。

吉和集落の中心は標高約600mの盆地にあり、街中を国道186号（島根県江津市～広島県大竹市）が走っている。並行して中国縦貫自動車道（1983年開通）があり、吉和インターから隣町の戸河内インター（広島県山県郡安芸太田町）に通じている。

十方山の位置

十方山の位置は、吉和集落の北側になる。立岩山～市間山の向こう側で、広島・島根県境尾根のこちら側である。そして、十方山に沿って、2本の道路がすでに開通している。十方山林道（十方山北側）と広島県道296号（十方山南側）である。

広島県道がある（十方山南側）

広島県道296号（吉和戸河内線）は、立岩貯水池の横から戸河内に通じる道路で、総延長約21.5kmのうち、異常気象時通行規制区間18.3kmおよび冬期閉鎖区間（12月15日～翌年3月15日）6.7kmを含んでいる。つまり、県道296号は、冬期雪に閉ざされる可能性があることを示している。

十方山林道がある（十方山北側）

吉和地区には、一般国道と高速道路、そして県道の3本の舗装道路がすでに存在している。これに加えて、「既存・未舗装」の十方山林道（細見谷林道）を、4本目の道路として拡幅舗装化する意義があるかどうかが問われている。なお、十方山林道は、冬期完全に雪で閉ざされてしまう。

第3節 廿日市市の植生

瀬戸内海（宮島）から西中国山地まで

廿日市市の市域は、平成の大合併後、海拔ゼロメートル地帯の瀬戸内海から標高 1300m 台の西中国山地まで広がった。そして、山向こうの隣町匹見町（旧・島根県美濃郡）は、ここも同様に合併して島根県益田市となった。つまり、瀬戸内海に浮かぶ宮島を擁する廿日市市が、日本海に面した益田市と、“西”中国山地で隣り合わせに並ぶことになったのである。

東アジアの植生分布

東アジアの植生分布は、長江（揚子江）流域を基点として、三つに大別できる。常緑広葉樹林帯（長江流域を含んでその南側）、落葉広葉樹林帯（北側）、および乾燥地帯（西側）の三つである（佐々木高明「日本文化の基層を探る」P.53）。

常緑広葉樹林帯（照葉樹林帯）とは、ネパール・ヒマラヤの中腹から長江（揚子江）流域を経て西南日本に至る帯状の地域で、イネの運ばれてきた南からの道である。これに対して、落葉広葉樹林帯（ナラ林帯）とは、東日本の縄文文化を支えた豊かな森であり、北からの道に連なっている。

廿日市市は2つの異なる森林帯を有する

東アジアの植生を二分する南北森林帯の境界線が、日本の本州を東西に分けていることになる。その中で、北に連なるナラ林帯は、実際には広島・山口・島根県境尾根を中心とする西中国山地まで延びてきている。十方山細見谷の「冷温帯落葉広葉樹林」（ブナなど）は、その典型例といってよいであろう。そして、廿日市市宮島の植生は、「暖温帯常緑広葉樹林」（照葉樹林）の典型例といえる。

廿日市市役所（瀬戸内海）～益田市役所（日本海）の間は、直線距離にして約 60 km くらいである。そして、廿日市市内の宮島～西中国山地間は直線距離約 35 km くらいだろう。たったこれだけの区間の同一市内に、東

アジアの植生を南北に二分する森林帯が両方とも手付かずで残っている。平成の大合併によって誕生した新生・廿日市市が得た財産は非常に大きい。両者とも、廿日市市の宝として、将来にわたって大切にしたいものである。

ユネスコ世界文化遺産「厳島神社」

廿日市市宮島町「厳島（宮島）」は、ユネスコ世界文化遺産「厳島神社」のある島である。社殿を中心とする厳島神社とともに、前面の海および背後の弥山^{みせん}原始林（天然記念物）を含む区域（厳島全島の約14%）が世界文化遺産に登録されている。そして、その区域を除く厳島全島がバッファゾーン（緩衝地帯）とされている。

弥山原始林は、「暖温帯常緑広葉樹林」（照葉樹林）で成り立っている。ただし、一般的な照葉樹林とはかなり趣が異なる。たとえば、南方系のミミズパイと針葉樹のモミが、同所で海岸部に見られることは、宮島以外ではまずお目にかかることのできない特異な現象とされている。ミミズパイは、広島などでは海岸沿いの暖かい場所にごくまれにみられる。これに対して、モミは本来、海拔500m前後の急傾斜地にみられる植物である。

海の厳島（宮島）に対して、吉和にある十方山・細見谷溪畔林は、「冷温帯落葉広葉樹林」で覆われた美しい水辺林となっている。そしてそこは、落葉広葉樹林帯の本州西端部にあまっている。

照葉樹林帯（南からの道）

照葉樹林帯は、佐々木高明によれば「ネパール・ヒマラヤでは高度一五〇〇メートルから二五〇〇メートルあたりにみられますが、そこからブータンやアッサムの山地、ミャンマー（ビルマ）北部を中心とする東南アジア北部の山地、さらに中国の雲南・貴州の高地をへて江南の山地に至り、海を越えて朝鮮半島南端部から西日本一帯をおおって本州の中部にまで達しています」（「日本文化の基層を探る」P.18）

照葉樹林帯には、モチの文化など共通する特有の文化要素が存在しており、照葉樹林文化と称されている。

ナラ林帯（北からの道）

佐々木高明は、日本文化の形成を考える時、照葉樹林文化という南からの文化に加えて、北からの文化にも注目すべきとして、ナラ林文化という仮説の枠組みを提示した。

ナラ林文化の領域は、長江や淮河より北側の落葉広葉樹林帯にある。「日本文化の基層を探る」P.53の図「東アジアの植生とナラ林文化・照葉樹林文化の領域」によれば、その範囲は、環日本海地域（朝鮮半島中・北部、中国東北部、ロシア沿海州、アムール川下流域、サハリン、北海道、東北日本）に加えて、華北一帯と読み取れる。

佐々木高明は、長江や淮河より北側の森林は、「主としてコナラ亜属（*Quercus*）の落葉広葉樹で構成されていますので、ナラ林帯とよぶことができますが、このナラ林帯はさらに二つに分けて考えるのがよいと思います」（同上P.54）と述べている。

すなわち、「淮河から遼東半島に至る、いわゆる華北一帯を占めているのがリョウトウナラ林」であり、「ハルビンと瀋陽をつなぐ線より東側は、（中略）モンゴリナラの分布域」となっている点に注意をうながしている。さらには、「沿海州からアムールの下流域までを含めて、広い意味のナラ林帯と考えておきたい」としている（同上P.54-55）。

なお、本節「廿日市市の植生」については、シンポジウム「廿日市の宝 細見谷」（2003年8月16日）の中の、金井塚務「概説、暖温帯・瀬戸内から冷温帯・本州最西端のブナ帯へ 世界的にも珍しいこの地域の特徴」により初めて認識した。

第4節 西中国山地は豪雪地帯

豪雪地帯

廿日市市吉和集落の中心は、吉和盆地（標高約 550m～650m）にあり、市垣内四等三角点（廿日市市吉和支所隣）の標高は 593.5m である。集落

の北側には、西中国山地(山頂部の標高約 1000m ~ 1300m 前後)が連なり、世界有数の豪雪地帯である日本海側気候の要素を有する地域となっている。

豪雪地帯対策特別措置法(1962年、昭和37年制定)によれば、広島県では、中国山地沿いの各地域が豪雪地帯に指定されており、その中で、廿日市市(旧吉和村のみ指定)は全国の最西端地域となっている。

「吉和村誌」(全2巻)第一集によれば、吉和小学校では、昭和38年(1963年)の豪雪(いわゆるサンパチ豪雪)により校舎2階が使用不能となった(同上P.836)こと、あるいは、吉和中学校でも、昭和34年(1959年)積雪のため臨時休校(同上P.839)、昭和38年(1963年)豪雪のため臨時休校(同上P.839)の記事がみえる。

また、昭和38年1月31日の積雪量は1m97cm(同上P.46)に達し、除雪作業がはかどらず、2月4日に21日ぶりにバスが開通した(同上P.50)とある。そして、2月15日には、災害救助法の適用(同上P.857)を受けている。

「吉和村誌・第一集」(P.6)は、「(吉和地域の)年平均気温は沿岸の広島域に比べて五度前後低いが、問題は最低気温にあって、沿岸部が零度前後であっても零下二十度を記録する事もある。従って、降雪量も多く、冬は根雪になって、山では四、五月まで消えない年も少なくない」と述べている。実際、大雪だった2006年(平成18年)には、十方山林道最高点の水越峠(標高990m台)付近一帯で、5月初旬に約30cmの残雪を認めている。

三八(さんぱち)豪雪

気象庁ホームページによれば、「昭和38年1月豪雪」の項で、「12月末から2月初めまでの約1か月にわたり北陸地方を中心に東北地方から九州にかけての広い範囲で降雪が持続した。冬型の気圧配置が続く中、前線や小低気圧が日本海で発生して通過したため、平野部での降雪が多くなった。最深積雪は福井で213cm、富山186cm、金沢181cm、伏木(富山県高岡市)225cm、長岡(新潟県長岡市)318cmを観測した」と述べている。

同ホームページ添付の「期間降雪量(センチ)」を示した全国地図(最大500cm以上まで段階的に表示)を見ると、西中国山地は、瀬戸内海地域と同じく降雪量"なし"、あるいはその1つ上の段階の"100cm以下"となっている。しかし実際には、吉和集落(標高約600m)においても積雪量1m97cmを記録しており、3週間もバス便が不通になっている。

三八豪雪について、「西中国山地」P.216をみると、「最多積雪日である昭和三十八年二月五日の中国地方全域の積雪図を作って見た。『水文気象』に記録されている中国地方の一九二観測地点の積雪量をプロットして画いたものである。広島を始め瀬戸内海沿岸部は積雪がないのに、西中国山地の恐羅漢山、苅尾山頂は五メートル以上の積雪量があった」と述べている。

「西中国山地は本州の西南端であり、標高も低いので、雪は積もらないだろうと思っている人は意外と多い。それは認識不足であって(同上P.216)三八豪雪時の積雪量は、西中国山地の山頂部では350cm以上、中には5m以上を記録した山域があるというのだ。

広島県廿日市市では、直線距離にして約25km程度しか離れていない地域同士が、一方は豪雪地帯(西中国山地)他方は無雪地帯(瀬戸内沿岸)というように隣り合わせに存在している。

三八豪雪時のことだと思うが、広島市西部(旧・佐伯郡五日市町)の瀬戸内沿岸部で、毎朝起きるとうっすらと雪が積もっており(2~3cm以下)、日が差すとすぐ消えてなくなるといった日が、何日か続いた年があったように記憶している。一方、新潟市郊外の平野部出身の妻は、昭和38年の冬には毎日自宅の二階から出入りしていたという。

西中国山地のスキー場

「戸河内町史(地理編)」P.286は、「天然の降雪で概ね2~3カ月滑走期間のあるスキー場が立地している地域としては、ここが南限であるといえよう(正確には「積雪南西限地域」というべき)」として、広島県最高峰の恐羅漢山1346.4mに広島で初めてスキー場ができたのは、昭和初期のころ

で、1967年（昭和42年）には、この地域に初めてリフト（チェア式）を伴う近代的スキー場が登場したことなどを紹介している。

恐羅漢山は、吉和地区（廿日市市）の北方（安芸太田町）にあたっている。そして、吉和地区にも本格的スキー場が二つある。女鹿平山 1082.5 m と、「もみのき森林公園」（小室井山 1072.2 m 南面）のスキー場である。

四国・九州のスキー場をみると、石鎚（愛媛県）剣（徳島県）そして九重（大分県）などでも冬期2～3か月間リフトが運営されている。しかし、その数は地域ごとに1～2か所に限られている。これに対して、西中国山地では、広島県側にざっと数えて10か所以上のスキー場が集中して存在している。吉和地区のスキー場が、その西中国山地最西南端のものであることは間違いない。

人口動態

広島県廿日市市吉和小学校ホームページによれば、「人口の動きは、昭和25年の2,673人をピークとして昭和30年ごろから、国の高度経済成長とあいまって、人口の減少が目立ち始め、昭和38年の豪雪以降離村がますます激しくなり、「過疎化現象」が進み、平成15年2月末現在世帯数403世帯、人口842人である。」（2006年12月閲覧）

ただし、「吉和村誌」吉和村の人口推移（P.821）によれば、昭和20年に3,101人という最大人口が記録されている。いずれにしても戦後一貫して人口は減少している。

吉和小学校ホームページおよび「吉和村誌」（P.836）によれば、平成18年度（2006年度）児童数30名に対して、過去最大の児童数は383名（昭和34年度、1959年度）となっている。いわゆる団塊の世代一期生が小学校6年生の時ということになる。（参考：1960年の吉和村人口、2,377人）

AKIMASA.NET

<http://www.akimasa21.net/>

「細見谷溪畔林と十方山林道」